

遠い昔の思い出を手繰って思うことは、寒さと飢餓に倒れて逝った人々のご冥福のため「遺骨帰還を」の事を遂げてほしいと願う。

万死を乗り越えて生還できた身の幸運に感謝しつつ、引揚船内で台頭した「艱難に耐えられる修行を了えた再生だ」という自負は、引揚げ後の耐乏生活を凌ぐ人生訓となっている。

なお、収容されていたところの地名や収容所名は収容所にいる間は教えられなくて、ナホトカに来てから教えられたように記憶している。

外部との交渉は全くないといえる状況で、作業監督の大声で怒鳴る声が印象深く耳について夢にも現れることもあったが、近ごろはそれもなく、寒くひもじいシベリアが遠のいてしまつて思い起こせなくなつてきているのも情けない話だ。

## シベリアに抑留されて

和歌山県 山本良市

本籍は、和歌山県日高郡龍神村大字三ツ又七十番地。生年月日は大正十二年一月九日である。

父、山本音吉と母ハナエの長男として出生し、昭和十二年三月、龍神村尋常高等小学校高等科を卒業し、自営農林業に従事中、昭和十七年八月中旬、徴用令により、名古屋市港区大江町三菱航空機工場で約一カ月の訓練を受けた後、部品製造の徴用工として夜勤、残業、徹夜の明け暮れだった。

昭和十八年の徴兵検査では、左耳難聴で一乙合格。

昭和十九年八月一日、現役兵として浜松第七航空教育隊に入隊して、満州第二十六教育飛行隊に転属。八月九日、夜汽車で浜松を出発して、八月十一日夕刻博多港から乗船し、夜間航行で玄界灘を渡るが風波高く、船倉では船酔いに苦しんだ。立哨当番で甲板に立った。

「海峡は、敵の潜水艦や魚雷艦の待ち伏せが多くて夜間は特に危険なのだ、十分に見張れ」と、生まれて初めて船上で揺れに耐えながら緊張に震えたが、無事に入港できた。

八月十二日朝、朝鮮の釜山港駅から列車で北上する。

八月十四日、満州国錦州省錦県の飛行場部隊に入る。

八月二十日、吉林省延吉の教育隊に派遣される。十一月末ごろ教育修了し、ハルビンへ移駐している原隊へ復帰した。

十二月末ころ、満州第一六六七五部隊へ転属を命ぜられて錦県に赴任した。

二十年四月ころ、溝帮子こうぼうしの特攻教育隊へ分遣されて整備勤務とともに衛兵勤務にも就いたが、望楼で立哨中に、延々と長蛇の輸送列車に兵員を満載して北上するのを度々見かけた。それは本土防衛隊だと聞いた。

北支方面から移動したのだろうか、無事本土に到着しておればよいし、北鮮辺りへ移駐してシベリアへ連れて行かれたとすれば、武運拙い部隊だったなあとと思う。運不運は結果論であるが、微妙に分かれるものである。

特攻教育を受けた若い隊員は、教育途中に出撃したりして落ち着かない時期であった。

七月に四平街に分駐のころ、岡田隊に移る。

八月十六日、四平街から錦県へ移動の途中に、奉天駅で現地人が日本兵の飯盒を盗って逃げる事件があった騒ぎの中で、日本敗戦を現地人がよく知っていて驚くとともに不安でいっぱいであったが、錦県の部隊本部に帰着して戦闘機や特攻機の整備を済ませて、燃料を全部抜いて格納した。

飛行将校連中が、夜陰に乗じて燃料を無断補給して本土帰還を期し発進したが、無事到着はできず、朝鮮半島沖で海中に突入したとの噂があった。

八月二十九日、本土へ帰還を計った移動途中を大石橋でソ連軍により武装解除となる。三八式歩兵銃と銃剣帯ごと手渡して身軽になった。その日から数日滞留監禁の後、食糧配給で二週間分くらい糶を支給されたから、大慌てで一升瓶や五合瓶を拾い、各人は糶を瓶に移して棒で搗いてから炊飯するまで時間がかかり、一日中、糶の脱殻に費やして苦勞した。

行軍で海城へ移動したが、日本軍人以外も含めて二  
〜三万人は集められていた。

集結区域に将校官舎や鉄道職員宿舎などがあつたの  
で、ある日官舎街を散歩していたとき、家から赤子を  
背負つて幼児の手を引いた奥さんが現れて、「先日主人  
が召集されて留守中にこの騒ぎでしょ、どうしてよい  
か、この先どんなことが起こるか心配で気が狂いそう  
で、何とか助けてくれませんか」と話しかけてきた。  
立ち止まつて話を聞いていたら、隣近所の家々から、  
それぞれに赤子を抱いたり子供連れの奥さんたち数人  
が集まつてきて「兵隊さん、どうかこの家で一緒に  
いてくださいよ、兵舎にいても同じでしょう。男の人  
が一人もいなくなつて私たち、ソ連の兵隊が恐いから  
日本の男の人にもいらいたいです。どうかお助け  
ください、兵隊さん」と口々に頼まれるので戸惑つた。  
奥さんたちの不安そうな様子が気の毒に思えて心を縛  
つた。しかし、部隊から離れての行動は考えられな  
かつた。「私も囚われの身で、勝手に動けば戦友にも迷  
惑をかけるし、奥さん方のお役に立てなくてすみませ

んが、どうか皆さんで力を合わせて、無事本土へお帰  
りになられるよう心からお祈りします。どうかお元氣  
で」と後ろ髪を引かれるような思いで立ち戻つた。

その後、ソ連兵による日本兵の所持品、特に時計と  
万年筆など貴重品の掠奪が多発していたが、日本人家  
屋にも侵入して家捜しで貴重品を奪い、婦女暴行に及  
ぶため、数軒分の人々が寄り合い一軒に集まつて住み、  
お互いに身を守り合っていると噂されるのを聞いて、  
先日逢つた奥さん方のことが思い出されて、あの人た  
ちだけは襲われることのないように、年端もいかない  
子供たちに苦難の及ばないようにと心密かに祈つたこ  
とが思い出された。あの人たちはあれからどんな経過  
を辿つて帰国を果たしたのか、海城の地で果てたのか、  
知る由もないことであるが、敗戦の一面を見た。

昭和二十年十月末ころに一個大隊千人の作業大隊が  
編制されたが、兵隊姿に変装した女性が逃走中に兵隊  
の列に紛れ込んだのであろう、相当大勢いたが、彼女  
たち全部を含めて編制表が読み上げられた。私は第十  
三大隊と決まつた。大隊長は千原少佐。貨物列車の長

い列へ第十三大隊と第十四大隊が乗せられた。一貨車へ四十人ずつ詰め込まれた。貨車は、中央が両面に両引戸のある有蓋車で、中は貨車の中央にグルマストープが一個据え付けてあり、前後の部分は松板の棚で仕切られ、下段には粟稈が敷いてあったが、棚板は生板であった。

列車は出発前に外から扉に掛け金が掛けられて開かなくされてしまった。グルマストープは薪で取るようにしていたが、なかなか暖まらない。どこでいつまで停車するのか予定はないようだ。動かないことが大概で、我々が停車中には、ソ連軍が満州で接收した資材や資源を輸送する長蛇の列車が次々と北上していた。

停車中はよく列車の下に並んで排便をしたものだ。出発してから一カ月余りを経て到着した田舎の小さな引込線で貨物列車から降ろされて、仮収容所まで行軍した。草原を進んで着いたが、天井から星の見える建物であった。

トラック輸送で最初の収容所へ送られた。ここは半地下式で二段棚の木造だった。そして、ストープもダ

ルマ式で薪を焚いた。草原は枯れ草、雪は少ないが寒さはひどいもので、零下五〇度を下り、空っ風に曝されるので、寒いより痛い感じで、朝の人員確認点呼は特に辛かった。また給与がひどく悪い。今思い出しても腹が立つ。人間用と家畜飼料を混合して支給されるため、米麦粟黍でも無搗精の粃、殻つき高粱、粒玉蜀黍、大豆粕、大豆、な豆などを給食用に配給され、煮ても煮ても食べられない食事ができて大迷惑で、体調を壊し下痢、栄養失調で体力がガタ落ちになった。慣れない労働を強制されたから、飢えと寒さに耐えきれずに二十一年の春を待たずに無念の憤死を遂げた戦友たちが、凍った草原で死体を狼に食われたという噂を聞いた。草原には沢山狼がいて、ラーゲルの夜は遠吠えの声を聞いたものです。

ラーゲル入りに当たって入浴があり、衣料品一切を熱気消毒する一方で体毛を剃り落としたので、虱しらみは死んで楽になったが、翌日から体毛の伸びるに伴って痒くて困った。

最初の作業は倉庫の荷役であった。その倉庫は相当

大きな川の岸に建っていた。そして河水は凍結して  
て広く、大型トラックも自由に通行していた。

河口はバイカル湖と聞く。荷物は主に食料品で、船  
着場からベルトコンベヤーに載せたり、倉庫からトラ  
ックで積み込むこともベルトコンベヤーを利用して二  
人一組で仕事をしたが、力の要る作業であった。

気の合った強力な相棒と組んでの作業であったから  
大いに能率を上げたが、砂糖や粉袋で一個が百キログ  
ラムを超えて詰めた物がくるため、指や掌が痛んで苦  
勞した。常に作業中は素手であった。荷役の役得は、  
食料袋の破れた袋から増し飼いを時々失敬して体調  
を保つことであった。このときの重量荷積み下ろし作  
業で肩と腰に負担が掛かり過ぎたために、帰国後、長  
年月、始終鍼灸治療に通い続けているが完治せず苦し  
い。骨頭変形になった。

昭和二十一年秋ごろからのラーゲルはウランバート  
ルに移った。ここは暖房も石炭も使えて住み心地はよ  
かった。作業隊では建築全般の作業班に分かれていて、  
私の班は左官工事を担当させられた。「木摺打ち」と

言って、細薄板を壁骨や天井骨に小クギで隙間を少な  
く並べて丹念に打ち止める作業で、最も時間を取られ  
疲れる仕事だ。

次に「モルタル塗り」と「仕上げ塗り」や「吹き付  
け」の化粧仕上げまで、建物一棟ごとに移って働いた。  
建物は一般住宅が主で大きな劇場も建てたが、次第に  
要領が良くなり、出来上がりが良いと褒められること  
もあったが、食糧給与は相変わらず少なく空腹続きで  
あった。黒パンとスープの給食二食分を受け取って朝  
食に全部食べて満足感を味わい、昼食時は水を飲んで  
耐える者が続出していった。他の班では石工班と言って  
基礎用石を切り出し、叩き揃えて並べる作業だが、ほ  
んど毎日のように夜遅くまでノルマ不足で帰しても  
らえず、常に空腹と疲労で苦しんでいると聞いた。そ  
の他、煉瓦工場へ行っている組や種々の班があったよ  
うだが、詳しくは知らされなかったし、当初戦友であ  
って抑留地まで一緒だった友だちとも別れてしまっ  
て、どここの部隊から来たのか、何と名乗っているのか分  
からない人へ次から次へと仕事の相棒が変わっていくた

め、仕事場では話し合つて一日を過ごす、心を割つて付き合える友人ができず、一緒に働いた者の名も忘れた。

「働かざるもの食うべからず」の鉄則で叩きのめされたと思つている。

輸送中に随分弱つた。体力が回復する余裕を与えず、銃剣で脅され、更に寒いというより痛い零下四〇度、四五度になつても日曜日以外は作業を休ませてもらえず、足が痛み苦しかった。衣類は着たままで、下着の交換など一切追加支給がなかったから、おんぼろ下着の修繕に苦労した。外套や上衣は汗と垢に汚れ真っ黒く光つていたが、着の身着のまま寝起きて、作業もそのまま出掛けたから糞虫のような生活であつた。幸いにも病氣らしい病氣にかからなかつたので、体力消耗はあつたが、無事に昭和二十二年十一月、ナホトカ港に着き幕舎へ収容された。ここには十日ばかりいたが、作業は薪割りと貨車から松丸太を下ろす作業を割り当てられたくらいで、ほとんど休息の毎日だつた。

点呼の後で民主化教育が行われ、日本人の講師が、

資本主義と天皇制の粉砕が絶対必要だと熱っぽく檄を飛ばすのを聞いた。時折聴衆の中から、講師に迎合する掛け声がかかると、皆で拍手をした。皆が腕を組んで労働歌を声高く歌いながらデモの練習のジクザク行進も日課の一つだつた。ここに着いてからだれが言い出したか分からないが、「前歴調べをされて、好ましくない者は帰国させずシベリアへ帰されるそうだ。だれにどんな告げ口をされるか分からないから控え目に振る舞え。スパイは仲間の中にいて知らん顔で我々の話を聞いている。うっかり話をしたら失敗する」と囁き伝えられて、その話の原因か、日常の会話が聞き取れなくなつて何となく沈んだ空気が漂つた。舎内はもちろん舎外でも、二人が肩を落とし顔を寄せ合い囁き合う姿ばかり目について、異様に静かであつたことが印象に残つている。ナホトカでは入浴させられて、久しぶりに汚れを洗い落としてサツパリしたところへ、下着も洗濯消毒済みを支給された。また軍服も旧日本軍の物を支給されたから、作業汚れて真っ黒かつた全員が明るく生まれ変わったように振る舞つた。しかし、

今の今まで肌身離さず隠し持つて遺族に届けようと大事にしていた遺品も剝ぎ取られたと悔しがる者がいた。さらに幕舎で所持品検査があつて、日記、随想、絵画や匙、フォーク、将棋、麻雀、碁などの工作品一切を没収された。

抑留中は用足しの紙不足に困つた。古新聞などを奪い合つて争うこともあり、日本新聞が張り出されたと聞いて見に行つたら、だれかに盗られた後だつたりした。五センチ角くらいの古新聞二枚の貸し借りが隣同士の付き合ひだつた。

昭和二十二年十一月十六日に引揚船新興丸に乗船。出港すると、收容所時代の旧幹部の吊るし上げが始まつた。收容所で体調不良者に労働を強制した状況など罪状を暴露、譴責する様は酷いことに見えるが、我々の知らない場所での出来事が問題なので、成り行きを固唾をのんで見守るのみで、早く終結すればよいと待つた。罵詈雑言の後恨みの鉄拳も振るわれたが、大事故にならずに治まつたからひと安心でした。

船内給食、白米飯で御馳走の味には感激した。さす

がに日本、瑞穂の国だ、米の甘さが格別であつた。十一月十七日函館港に到着して、引揚げ手続やDDTを浴びせられ、毛布二枚と七ツ釦の軍服をもらう。十一月十九日上陸を許され、引揚げ荷物を背負つて帰途につく。

連絡船も列車も順調に乗り継いで南部駅に着いたら二十一日夜であつた。駅前のウドン店に立ち寄つて腹拵えにウドンを頼んだら、主人が私の服装と荷物を見て「今お帰りですか、どちらまで」と問われるままに、「シベリア引揚げで、龍神村へ帰らんらんがバスも無うなつた、駅の待合でも寝て帰ろうと思つて腹拵えに寄せてもらつた」と言うと、「今どき駅の待合室に寝たらその荷物皆なくなるぜ、ちよつと待たんせ、宿頼んであげる」と隣の家に行き、戻つてきてから、「大層苦勞されてのお帰り、本当にご苦勞様でした。心ばかりで失礼ですが、私どもの気持ちをお受けください」と宿代、ウドン代も取らないで、隣家へ泊めていただき、朝食を馳走してくださつた。夕食代と宿代はいかほどの相場か見当もつかなかつた。

見合つた支払い代金も成し得ず、ご厚意に甘えたお礼の挨拶をしてバス停に並んで待っていると、昨夜泊めてくれた家の小学五年生くらいの娘さんが「どうぞ」と言つてタバコ一箱を届けに来てくれたので、「大きにありがとう。お母さんよろしく」と遠慮なく頂戴した。旅行者はタバコの入手が難しい状況だから非常に有り難かつた。早速火をつけて煙を吸いながら、「ああよかつた」と落ち着いた気分が一番のバスに乗つた。

十一月二十二日夕方近く、懐かしい父母の住む山里へ帰り着き、無事を喜び合つた。

当時南部の町へは往復二日の行程だつたからなかなか出る機会がなく、ウドン屋様へと手紙を書く勇氣も出せず、そのうち、ついでの折にお礼に寄ろうと心積もりを抱いたまま年月が流れた。

昭和四十五年ころに山里に林道が拓けたから、古くから徒歩で山越えしてバスと一日かかつていたのが自動車で二時間くらいだ。早速南部自動車学校に入校し、田辺の宿から通うこととして駅前のウドン屋を探した

がなくなつてゐる。当時の記憶を辿つてウドン屋であつた家で問うたら、家主が代わつていて、先住者のことは分からないと言う。付近で古くから開いている店で、当時のウドン屋の話をして、いつごろどこへ移つたかを調べ歩いたが、だれも覚えていないと言つて分からなかつた。

田舎であつたら皆覚えていてくれるのに町は不人情だと思ふとともに、年月が経ち過ぎていたのに驚く。もつと早く探してお礼に伺わなかつたのが気がかりだ。どうしておられることか、優しかつた方々は！失礼して申し訳ない。

ソ連兵の銃剣に脅かされて酷寒の荒野で強い砂埃を浴びながら、ノルマ、ノルマと毎日、暗い朝から暗い夜まで労働を強いられたところに汚れた軍服が今ここに。腰を落とし膝も曲がつて哀れに疲れ果て、のろのろ足を引きずり引きずり、声もなく、背を丸めて両手を凍らさないように前で擦り合わせながら耐え難きに耐え得たのも、不便な山里で自らの足だけを頼りに鍛え上げた体があつたこと、まだ若かつたこと、神経

質に育たなかったことを感謝する反面、哀れにも生命を落とした数多くの戦友たちの遺骨を故郷に戻し慰霊すること。我々は現地の通貨を見せでもらったこともなく、賃金等一切支払われていないのだ。給食も家畜の餌と変わらぬ物で、人間として扱われていなかったのも悔しい限りであったことを申し残しておく。